

国語史研究の一方

——基礎語史研究の意義とその実践——

キーワード… 語彙史、基礎語、基礎語史、ナカ、ウチ

要旨

従来の国語史研究では、音韻史や文法史については、それぞれ、ハ行子音の変遷、動詞活用 of 歴史のように、上代から現代までを通観する立場で記述することが主流であったのに対して、語彙史では、各時代の個別的な事象を個々に記述することが多かった。この不均衡を解消させるために、本稿では、ウチ／ナカという基礎語につき、上代以来の通史という観点からの記述を提案し、その概要を実践した。そして、特にウチの語史を、ナカとの対比によって実証的にたどりつつ、土左日記承平四年十二月廿七日の「かくあるうちに」のウチを「かくある人々のナカで」と解する（従来の説に多い）のは正しくなく、時間的経過を示すものとすべきだと考え、またウチが「多くの人（物）の一部」の意となった経過を、中古以降の史料で跡づけ、基礎語史研究の一例とした。

日 野 資 純

一、序 論

近年の国語史研究は、現代語研究の隆盛の影で次第に活力を失い、問題意識も拡散しつつあるという指摘が、本誌一九二集141ページに見える。ただし『国語年鑑一九九七年版』の「国語史一般」の項には、築島裕氏「平安時代訓点本論考 研究篇」（汲古書院、一九九六年五月）、池上秋彦氏「国語史から見た近代語」（東苑社、同七月）、馬淵和夫氏「国語史叢考」（笠間書院、同十二月）等の大著が挙がっている。研究の流れが脈々と続いているのは疑いない。

しかし、基礎語研究を重視したい私の立場から言うと、国語史の各時代ごと、分野ごとの記述に加えて、上代から現代までを通観するような記述を、色々な基礎語について整備することができれば、新しい展望が開けると同時に、従来の古典の解釈についても改善できる面があると考える。もし「問題意識」が「拡散しつつある」のなら、こういう点に関心を集約するという方向を探ってみたい。

この考え方によれば、従来型の音韻史、文字史、語彙史、文法史のような分類の大きくを崩すことなく、しかも、特に音韻史、文法史の掘ってきた齊一性という記述の原理（後述）を、語彙史の面にも

活用するという効力を發揮するのである。

まず、その具体例を挙げて、本論への導入としたい。

土井忠生・森田武両氏共編『国語史要説』(修文館刊)は、一九五五年の初版以来、一九九八年までに二十二版を重ねており、国語史のテキストとして普及しているが、時代区分を上代、中古、中世、近世、現代とした上で、各時代については、「文字・中央語と地方語・音韻・文法・語彙」という分野別を基本とする(以上、上代の例)。そして、例えば音韻では、各時代ごとに、五十音図各行の主要音節の状況が説かれ、特にハ行子音について詳しい。すなわち、語頭では上代から中世末まで[F]であり、近世以降[h]となったと述べるほか、巻末の「結語」でもその変遷がまとめて記述してある。私が先に、「上代から現代までを通観するような記述」「斉一性」と述べたのは、こういうものをさすのであって、同質のものを材料とする通史であると言える。

ところが、このテキストで、語彙についての記述法を検討すると、音韻とは全く異なった方法が採られており、「同質のもの」の通史という視点とは、かけはなれている。

すなわち、上代では漢語・梵語等の流入、中古では漢語が「国語化」して、形容詞・形容動詞・副詞としても使用されたこと、中世ではポルトガル語の流入、武士詞と女房詞の発生、近世では漢語の「通俗的用法」(「変化する」等)のほか、英語・スペイン語・ポルトガル語・オランダ語の輸入、接統詞などが他の品詞から転成したこと(「それ」↓「それから」等)、そして現代では、一層盛んになった外来語の流入、漢字制限による漢字の書きかえ(興論)↓世論等が扱われており、語彙が時代の影響を受けやすいことや、その多面性について

も理解できるようには配慮してあるが、全時代を一貫する問題は扱われておらず、音韻・文法に比べると著しく均衡を欠いている。

そして、このように語彙と他の分野との記述が不均衡であるのは、『国語史概説』(一九七二年、秀英出版刊)、『新編国語史概説』(一九七八年、有精堂刊)などでもほとんど同様である。

もちろん、右のような不均衡については相当の理由がある。すなわち音韻(アクセントも含めて)・文法にはそれぞれ整然とした体系があるので、史の変遷の過程にもそれに対応する規則性を認めやすいのだが、語彙にはそのような体系性を認めにくいために、史の変遷についてそれを求めても無理だという理由づけができるかもしれない。

しかし語彙の場合でも、特に類義語間、対義語間では、一定の安定した関係のあることが多く、それを資料に即して整理すれば、その規則性が歴史的にも長期にわたって保たれる傾向があり、その傾向は特に基礎語の場合に顕著に現れやすいと予測される。また類義語間の関係が変わる時の状況にも注意すれば、従来の古典の解釈の面にも修正を加える場合がある。

本稿では、こういう趣旨を踏まえて、基礎語史の整備により、従来の国語史研究がどのように補充されるかという問題につき、ナカ・ウチという類義語のセットを例として、実証的に論じてみたい。

二、語彙史研究における基礎語史研究の

意義とその実践例——ナカとウチ——

① はじめに

本稿で扱う「基礎語」とは、拙著『基礎語研究序説』(一九九一年、

桜楓社刊、『古典解釈のための基礎語研究』（一九九六年、東苑社刊）で記した規定に基づき、

時代による変動が少なく、各時代にわたって使用され、現代語にも生きており、性別・年齢別・職業別・階層別・地域別等の相違がほとんどなく、安定している語。（拙著『基礎語研究序説』37ページ）

という概念で考えてゆきたい。

右のような基礎語の実例は、「目・耳・鼻・口」等の人体関係の語、「ウエ／カミ、ナカ／ウチ、シタ／シモ／モト」等、生活に密着した語などであるが、特に後者の一群のように、類義語のセットとして考えられるものが多い。

このような語につき、国語史・語彙史の立場から「基礎語史」としてとらえることができるが、「耳・鼻・口」等は上代から現代まで、基本的な点では、ほとんど語形や意味の変化がなく、「ウエ・カミ・ナカ・ウチ」等については、各項の正確な語史が、十分には解明されていない。それが解明されていないと、どういふ問題が生ずるかを、ウチの語史を例として説明したい。

② ウチの語史の一面——ナカとの関連という視点から——

これから問題とするのは、従来の考えによれば「土左日記の解釈上の問題」であるが、私見では、明瞭に「国語史的な問題」に関係する。その理由は、以下の叙述において徐々に判明するはずである。

まず秋谷朴氏編、新典社版『影印本土左日記』により、問題の部分を挙げる。（現行字体に改めて引用）

1. 廿七日おほつよりうらとをさしてこきいつかくあるうちに京にてうまれたりしをんなこくに、てにはかにうせにしかはこのころ

のいてたちいそきをみれとなにこともいはず（23—4—8）

まず右の「かくあるうちに」を、従来の主な注釈書がどのように解しているかを一覽する。

・こうしたこへ中略が、いろいろとあつた中でも特に。（旧日本古典文学大系29ページ頭注二一・略称「旧大系」）（一九五七年）
 ・この一行の人々の中で（或る人は）。（土佐日記全注釈93ページ）（一九六七年）

・こうして帰京の旅をする一行の人々の中に。（日本古典文学全集31ページ）（一九七三年）
 ・こうして帰京の旅をする人々の中で、ある人（貫之は）。（完訳日本の古典98ページ）（一九八三年）

・こうして帰京する人々の中で。（新日本古典文学大系5ページ）（一九八九年）
 「旧大系・集成」だけが事態の経過と見ているようだが、それ以外の注釈では、すべて「かくある（人々の）うちに」という解になっている。すなわち「ウチはこの時代でも現代と同様に、多くの物事から何かを選び出すような場合に用いられていた」という前提に立っているが、それははたして原典に即した解であろうか。さらに言えば、ウチについて、当時と現代では意味の変化がありうるという国語史的観点が、完全に脱落してしまっている点が大問題なのである。

そして右のような「現代語訳」にほとんど無意識的に現れる「人々の中で」の「中（ナカ）」が土左日記にも使われていて、そのナカと、この場合のウチとはどのように意味が異なるかという点にこそ、関

心を向けるべきである。

まず、土左のナカ11例中、次の6例に注目したい。

2. かみのたちのひとくくのなかにこのきたるひとくそこゝろあるやうにはいはれほのめく(十二月廿七日、影印本25—3—4)

3. これかれたかひにくにのさかひのうちはとてみおくりにくるひとあまたかなかに……(一月九日、38—2—3)

4. ……おきなひとひとりたうめひとりあるかなかにこゝちあしみて……(同、43—3—5)

5. このなかにあはちのたうめといふひとのよめるうた(二月廿六日、67—2—68—1)

6. これかなかにこゝちなやむふなきみ……(二月六日、89—1—3—2)

7. かくのほるひとくくのなかに……(同九日、96—1—3)

すなわち、多数の人々の場合には必ずナカが現れているのであって、上掲例文1で、旧大系と集成以外が、本文に「かくあるうちに」とウチがあるにもかかわらず「……人々の中で」と解している点に、大きな疑問が生ずるのである。つまり、「人々の中で」の意であるなら、本文が当然「かくある(人々の)なかに」となるはずだからである。

それでは「かくあるうちに」の本文をどう解すべきか。ここで当然、ウチの語史の説明が先行しなければならぬ。

ウチは上代以来、まず「空間的な、閉鎖的内部」の意を中心としてきたが(例文8)、上代ですでに時間的意味への転用が現れている(例文9)。

8. 大宮の字知にも外にも光るまで 降れる白雪見れど飽かぬかも
(万葉集卷十七326、大系本万葉集四186—187)

9. 大君の任のまにまに 執り持ちて仕ふる国の 年の内の 事か
たね持ち……(卷十八4116、同294—295)

8のウチは「宮廷の内部」だが、9のトシノウチは、天皇の命により、一年間分の書類(報告書)を結んで持って都へ上る意であるから、ウチは時間の意へと転じており、その用法は中古の古今集などへ受けつがれるのである。

10. 年のうちに春は来にけりひととせを 去年とやいはむ今年とや
いはむ(古今春上1・日本古典文学全集・古今和歌集63ページ)

このようなウチが土左日記にも現れたと見たいのだが、例文1のように、動詞「あり」の連体形に続いたものとして注目すべきは、土左自身の次の例である。

11. かゝるうちになほかなしきにたへすしてひそかにこゝろしれる
ひとゝいへりけるうた(二月十六日、107—1—3—108—1)

これは京都のわが家にもどつた貫之が、一緒に帰つた人々の子供たちが騒いでいるのを見ながら、亡き子を思い出して感慨にふける場面だが、「かゝるうちに」は「こういうふうな事態が経過して」の意であり、そのウチは、8—10のようなウチの発展的用法だとみられる。それなら、問題の「かくあるうちに」は、右の「かゝる」という母音脱落([Kakuru]→Kakuru)を起こす以前の原形だとみられるので、そのウチを「このような経過において」の意味でとらえることができよう。

この点をなお、土左日記以後の実例でたしかめてみる。

「かくあるうちに」が私見のように「時間の経過」の意であることを補強するために、私は今昔物語語集の「有り」の用例を中心として探ってみた。「かくあるうちに」という表現が、中古のいくつかの作

品(落窪物語、かげろふ日記、枕草子、源氏物語、平中物語、堤中納言物語、紫式部日記、和泉式部日記、更級日記、大鏡等)に現れていないことを受けて、説話としての今昔物語集に、事件(時間)の経過を示す表現としてのその言いかたが、現れることを期待したからである(本文は旧日本古典文学大系による)。

12. 「万ノ人、皆此ク有ル也」ト。(1/3、今昔物語集一、57-11)

13. 十六ノ大国ノ王、様々ノ祈禱ヲ致シテ雨ノ降ラム事ヲ願フト云モ、
更ニ力不及ス、何ナレカク有ルト云フ事ヲ不知ス。(5/4、一、349-7)

14. 若シ、定ル報有バアラ何ソ如此ク有ルト。(9/14、二、204-10)

12は「すべての人が老いること」、13は「祈禱をしたのに雨が降らないという経過であること」、14は「自分は生前の罪は少なかったのになぜ冥土に召されるという経過になったのか」という疑念を表す。すなわち、カクアルは客観的な事態の時間的な推移を示している。

15. 「汝チ、何ナル故ニ此ク有ゾ。(16/26、三、47-12)

16. 「仏物ナレ此ク有ル也」云テ……(19/22、四、108-4)

17. 「……貧キ身ニ年来ノ貯ヘテ此ノ新ト貯ヘ置テ願ヲ逐ルヲ、俄ニ大魔障出来テ妨グル功徳ノ実ナレ此ク有ル也。……」(20/36、四、204-7)

8

15は盗人をめがけて射た矢が三度も外れたので、射た者が「なぜこうであるのか(外れるのか)」と尋ねており、16は仏への供物(冷麦)を勝手に自分の物としたことをさして、「こうである(冷麦が蛇に変わった)のは当然の応報だ」と述べ、17は「法会に役立てるために長年貯えておいたものを、急に大悪魔が出て来て妨げたのは、私の功徳がそれだけの実効しかなかったために、こうなっているのだ」の意であるから、やはり事柄の自然な推移そのものをさして「カクアル

……」と述べているとみられる。

このように、今昔でも「カクアル……」は時間の経過、事柄の自然な推移を示すものとして現れているので、上記土左日記の「かくあるうちに」の解釈を補強する実例として加えることができよう。なお「此ク有ル中ニ」のような例は見えないが、カカルホドニは現れているので、これも土左「かくあるうちに」を時間的意味に解するための参考とはなるであろう。

18. カル程ニ、太子、父ノ大王ノ宮ニ自然ラ迷ヒ至レリ。(4/4、一、274-15)

19. 此ル程ニ、暁ニ成バ、共ニ寝入ヌ。(27/24、四、511-14)

20. 此ル程ニ、「大きな者が」真サオニ光クリ。(27/35、四、526-12)

すなわち、空間の意味から時間的意味へ転じた点で、ウチとホドには共通の意味が認められるからである。

ところで、ウチの表す時間的意味は、土左日記以降どのように保たれて行ったか。

特に「かくあるうちに」の解釈上、参考となる例を、源氏物語について述べてみる。

源氏では「わりなくあるうちにも」が一例だけ現れている。

21. ゆめくといひやり給つ、おはしまさん事はいとわりなくあるうちにもこゝにもめとのいとさかしければかたかるへきよしを

きこゆ(うき舟・源氏物語大成三1901-2-4)

匂宮が、浮舟のいる宇治へ行くのは具合が悪いという文脈であるが、一方で、宇治でも乳母が口やかましいので、それは難しいという御返事をお出しになる——ここで「あるうちにも」は、事態が「い」とわりなし」という状況・経過であることを示している。

次の22では、「ことほりなるうちに」に注目する。

22. 京の御すみかたつねて時々の御せうそこなとありおなしさまにのみあるもことほりなるうちにこの月ころはありしにまさる物おもひにことくなくてすきゆく(若紫、一七六—12—14)

「ことほりなるうちに」は「ことほりにあるうちに」が原形だから、やはり参考になる。

源氏が尼君に消息を送るが、前後の事情から見て、尼君が従来同様返事をよこさないのも当然だという状況のため、源氏は以前にもまさる物思いにふけるのである。「当然だ」という状況の進行を「ことほりなるうちに」と述べている。

中世については、徒然草(鎌倉期)と天草本伊曾保物語(室町期)について見る。

徒然では「一刹那のうち(92段)・一日のうち(100段)」等に時間的意味のウチが上代以来のものとして受けつがれている一方で、21、22の系列として、次の二例が注目される。

23. 後はたれにと心ざす物あらばいけらんうちにぞゆるべき(140段、本文は勉誠社版鳥丸光広本徒然草218ページ。)

24. 心更にをこらずとも。仏前にありて。ずゝをとり経をとらば。纏怠るうちにも。善業をのづから修せられ。散乱の心ながらも。繩床に座せば。覚えずして禪定なるべし。(157段、同230ページ。)

23の傍線部は「生きている間に」の意、24は「修業を怠る期間にも」で、ともにウチは、時間の経過そのものを表している。

天草本伊曾保物語では、徒然の23をそのまま受けたような例が見える。

25. 「いかにシャント、我がまだigitte yru vchi ni. 別の妻をば何とし

てお持ちあらうぞ?……」(文禄二年(1593)版伊曾保物語425—9)

「生きているうちに」と同系列の表現は、なお近世語、近代語にも次のとおり引きつがれて、現代に至るのである。

26. ……こなたはやみくもと、「弥次と北八が」つかみあふてゐるうち、夜あけてなかう人のいも七、へ中略ここのうちへをとづれたるが、……(藤栗毛発端、大系39—10)

27. ヲヤく、どかく申うち、パツタリと日がかぐれました。(安愚楽鍋二下、「牛店雑談安愚楽鍋用語索引」の本文22裏2)

以上により、23のような用法がイディオム化して現代に及んだと解されよう。すなわち、土左日記に現れていた「時間の経過を示すウチ」は、上述のように中世以降も現代まで保たれてきたとみられる。逆に言えば、ウチの語史を資料に即してたどることにより、またナカとの相違をもふまえることによつて、土左日記という古典の解釈に、一説を加えることができるのである。

ただ、もちろん、これだけではウチの語史の一面にすぎない。関連して、ぜひ解明すべきことは、土左日記の「かくあるうちに」につき、従来の解を述べた折に言及したこと——「ウチはこの時代でも、多くの物事から何かを選び出すような場合に用いられていた」という前提が正しいかどうかである。

日本国語大辞典の「うち」内「内」曰【名】：⑤複数のものの中。ある種類に属する人。また、ものごと」の項には、宇津保物語ほか二例が見える。宇津保につき古典文庫本(日本国語大辞典の底本)により前部を補って挙げる。

28. 「そこく(こゝ)に人々つとへらるらめ。をのれをばそのうちにいれられぬ、つらしときこえむとぞや。」(二二五—5)

春宮が左大将に「あなたは聾を多くお持ちのようだが、私をその親しい仲間に入れて下さらぬのが残念だ」と述べる。何人かの聾を、一つの枠に入れて、その「内」と言う。

29. 源氏・関屋「なほ親しき家人のうちには数へ給ひけり」

これも、源氏が右衛門督を自らの「親しき家人」の枠内に囲み込んだのである。源氏物語ではその例を含めて、この種のウチが次のように現れている。

※かす(数)のうち

かすへのうち

2

心とけたる御むこのうち

1

めやすき人のうち

1

みこたちのうち

1

※いへ人のうち

1

「いへ人のうち」は29で日本国語が引くとおりだが、ほかに「かすのうち」をここで取り上げてみる。ここでは、先に例文8などにつき、ウチは上代以来「空間的な、閉鎖的内部」の意を中心とすると述べたことに関連する。

30. ……まいてや事なきつらにこそあらさらめこの御とのうつりのかすのうちにましましらひ給なましと思ふにあかすかなしくなむ思

ひける(玉かつら・源氏物語大成二71—9—10)

ここでは、右近が「もし夕顔が存命なら、今度の転居でも紫上や明石上と同等に扱われたのに」と残念がるのだから、夕顔を一定範囲内の女性の一人と考えているのである。

最後に、同辞典には平家物語の例がある。

31. 平家一・殿下乗合「隨身十人がうち右の府生武基がもとどりも

きられにけり」

隨身とは貴人の身辺を守る者だから、「身内」の者という意識からウチが現れたのではないか。これに直接続く文中には、

32. 其中に、藤藏人大夫隆教がもとどりをきるとて…(旧大系平家物語上19—8)

とあって、一般的表現としては「多くのもの」について「本来のナカ」が現れている。続く室町期の状況を、『時代別国語大辞典室町時代編』により概観すると、ウチについて「(四)数量や事物、場面などについて、ある事態の成立する一定の条件の範囲に含まれていること」とあり(傍点日野)、そのウに「特にその中から特定の一つが選択される場合における、対象とされる事物の範囲」(同)の例として次の二者等がある。

33. 始二執御乎執射乎ト云ハ、六芸ノ内ニ取分卑キ芸ラスト宣ル也。(下略)(応永本論語抄字穿)

34. 人ノ五体ノ内ニハ眼ニスギタル物ナシ。(太平記卅七、身子声聞、一角仙人、志賀寺上人事)

論語抄では、御と射を六芸という枠内の卑しきものと限定し、太平記でも、人間の五体という枠を設けてから眼に言及している。こう考えれば、これらのウチは、先に挙げた、複数のものについて用いられるナカとは異なつて、本来の「一定の枠内」の意からの発展と見られよう。太平記の例につき、同じ作品の次の例(本来のナカ)と比べれば、その点が理解できる。

35. 然ラバ三千ノ宮女ノ中ニ、容色殊ニ勝レタランヲ、人彼草庵ノ中へ被遺テ、(太平記卅七、大系太平記三382—1—383—1)

この例では、三千人から一人を選ぶという文脈だから、「宮女ノ中」

の「中」はナカである。すなわち、これが「本来のナカ」の例である。(前掲、土左日記のナカ参照「文例2」7)

こういうナカは、万葉以来「ノナカ(野中)」の語はあつても「ノウチ(野内)」のないことでもわかるように、一方で広い平面の一部(主として中心部)をさしていた。

36. 磐代之 野中、尔立有 結松 情毛不解 古所思(万葉卷二四、大系万葉集一86ページ)

37. 野中にをかたちたる所にたゝ木そみつたてる(定家自筆本更級日記「武蔵野書院刊」5-4)

なお右の例で「中」が漢字表記であつてもナカとよめるのは、野と同様に広い平面であるウミについて「ウミ(ノ)ナカ」は現れても「ウミ(ノ)ウチ」が現れないこと^{注3}で理解できよう。土左日記と源氏物語から例を挙げる。

38. こまつもかなといへとうみ^{注3}なかな^{注3}はかたしかし(土左日記影印本、一月廿九日、70-6)

39. うみのなかの龍王のいといたうものめてするものにて(源氏・すま、大成一436-7)

ところで、先の「五体ノ内」のように、現実のものの中の内部の意から発展したウチの用法は、外見上、従来のナカの領分を侵すような形で現れるようになる。すでに挙げた平家物語の例は、そこで述べたような経過によるものかと思われるが、なお、平家につき、天草版平家物語の本文を、覚一本系(龍谷大学本「旧日本古典文学大系底本」、百二十句本系(斯道文庫本))と比べてみると、天草本の独自本文とみられるものにウチ^{ウチ}の現れることの多い点が注意され、そのような用法がなお近世以降にまで続いているのではないかと推測

される。もちろん、この点は軽々に断定できることではないけれども、一つの注目点として示しておきたい。

天草本

A. 三百人の^{ウチ}たれなりとも、これを少し聞けば(12-6)

B. 生け捕りにせられた者も多かつた^{ウチ}に……齋明威儀師も捕られたと……(188-11)

C. 平家の一門の^{ウチ}に都にとどまられたはなかつたか(187-22)

D. 一門の^{ウチ}の経盛みやよをかへりみて(199-1)

E. その子たちの^{ウチ}から一人豊後へやりまらして(202-17)

F. 四大の^{ウチ}に水火風はつねに害をなせども(367-5)

龍谷大学本(旧大系本) 百二十句本

十四五六の童部を三百人揃て(上91-8) 「うち」なし

……といふ大力も……いけどり^{だかり}にせらる。……齋明威儀師もらははれぬ。(下74-7) 「うち」なし

「人名を列挙してはいるが、平家の一門の中に」のような文面なし

「落ち行く人々ガ」おのく^くうしろをかへりみ給へば(下111-4)

「落ち行く人々の人名を列挙(経盛を含む)。「門ノウチ」は、なし」 「七十句」 対応本文なし。

四大種の中に水火風は常に害をなせども(下十二721-4) 「百十三句」

四大種ノ中ニ水火風ハ常ニ害ヲナセトモ(卷十二721-4) 「百十三句」

○天草本は亀井高孝・阪田雪子翻字「ハビヤン抄平家物語」(一九六六年、吉川弘文館刊)

により、ローマ字の部分 (G) は福島邦道解説「天草版平家物語」(一九九四年、勉誠社刊) により、ページ・行数を記した。

○百二十句本は慶応義塾大学斯道文庫編「斯道文庫古典叢刊之二 百二十句本平家物語」(一九七〇年、汲古書院刊) によった。右の二点については、次項以下の語も同じ。

ABCDEF については、中古までであればナカが現れるのが自然であったのではないか。すなわち、先に挙げた土左日記の文例 2~7 を見れば、複数のものに言及する時は必ずナカであることがわかる。そして、少なくとも A~E については、右のうちで天草本のみに、確実なウチの現れている点^{ナカ}が注目されるのである。

ただし天草本でも、こういう場合にウチの現れる例が大勢を占めているわけではなく、次のような例では、前代までの主流と同様に、ナカが現れている。

G. 兵六千人あまり
生け捕られた、その
NACA に…… (68-89)
兵六千人いけどら
る。其中に大將軍蘇武
をはじめとして (上 205
-3) 「十八句」
千余人捕て胡国ニ留ラ
ル其中ニ (巻二 138-6)

H. 蘇武はひろい野
の NACA から這ひ出
て (70-1)
対応本文なし。

I. 松のひとむらあ
る NACA にかひがひ
しう壇を築いたこと
もなうて (78-9) 5)
松の一むらある中に、
かひがひしう壇をつい
たる事もなし。 (上 228-
3) 「二十五句」
松ノ一群有ル中ニ甲
斐々々シク壇ヲ築キタ
ル事モナシ (巻三 178-
3)

G は例えば土左 2~7 と同類であり、H は前掲万葉・更級の「野中」(36 37)、土左・源氏の「うみ(の) なか」(38 39) の系列に入るから、こういう点では前代までの伝統を受けつぎつつ、一方では、ウチについて A~F のような新傾向がみられる、と言えるのではなからうか。(なお龍谷大学本「旧大系平家」「其中」の「中」に振仮名はない

が、複数のものについては、
40. 南部の衆徒のなかへそ入にける。(上 111-1)
のようなナカが大勢を占めるので、G の「中」もナカとよんで、まちがいないであろう。)

要するに、天草本平家では、多数から一つを選択するような場合にも、ウチの使用例が現れてはいるけれども、それは、従来、その意味を主として担っていたナカとの共存であって、広い地域の一点をさす場合には、GHI のように、従来のナカが依然として主力であったかと推定されるのである。

ただし、語史の観点から見のがせないのは、天草本における B と G の両例であって、B では「多い」者についてウチが現れる一方で、G では「六千人」というやはり「多い」人数についてもナカが現れている点である。もちろん G が中古以来のものを受けつぎ、B が新用法であるが、現代語として考えてみると、現代語でも、たしかにこういう点ではナカとウチが「混用」されているので、こういう関係が近世語・近代語を通じて受けつがれていると、一応、一般的に考えることができよう。

語史研究というものは当然、一つの語単独の歴史の研究にとどまることなく、類義語や対義語との関係の受けつがれたかたにも注目すべきであるから、右のような「混用」が、実際にどのようなように伝えられてきているかをはつきりさせることが望ましい。

私はその点について史料の十分な調査を実施していないので、一般的な言明をすることはできないけれども、江戸語の史料として利用価値の高い滑稽本・浮世床について見ると、次のとおりである。

・底本 日本古典文学全集 47 『洒落本滑稽本人情本』所収 浮世床

〔中野三敏・神保五弥・前田愛校注、一九八三年第12版〕小学館刊

・索引 「柳髪新話浮世床総索引」〔稲垣正幸・山口豊編、一九八三年刊〕

武蔵野書院刊

A. ナカ

(1) 広い空間の中心、あるいは一定の空間の中心

(2) 複数のものの中心、あるいは多くのものの中心

存疑

B. ウチ

(1) 閉鎖的内部、あるいは一定の空間の枠の内部

(2) 抽象的なものの一部

ここではA(1)5例、A(2)4例、B(1)4例、B(2)3例、Bについて
は全例)を挙げる。(ウチの中で時間を表すものは除外した)

A. ナカ(1)

① 「扱其大雪の中をかきわけて池の端へ行て見た所が、一面に厚氷が下略(初上274-3、原則として「中」以外の振仮名の部分省略、以下同じ)

② 「何さ、少しは本のはしをもよむとわかると云事さ。其中に書たいやといふ事は、和文にいふ礼の事サ。(初中287-2)

③ 「盃の水の方向がナ、へ中略」腹の中から臍のあたりまで、染わたつて嬉やのう。(二上331-7)「死んだ犬が口よせに託したことばとして、たむけられた水について言う。」

④ 大道直して髪結床必ず十字街にあるが中にも、浮世風呂に隣れる家は、浮世床と名を称て、へ下略、地の文、初上283-3

⑤ ……今羽団の山おろし、思へばおもひまはすほど、羽が敵の雲の

中ちやよなア。(二上339-10)

A. ナカ(2)

⑥ 「浮世床近辺ノ家々ハ」栄枯貧福さまくなる中にも、楽隠居と見たる老人、……(地の文、初上264-3)

⑦ 千五百両も死金の這入中で「千五百両も遺産ノ入ル人モ多イ中デ、こちとらが伯母御ときたら、小づかひの二三百ツ、もこつちから

取られるのだ(初下311-4)

⑧ 「今マデノ人ノ戒名ハ」何とやら院、何く、何く信女と、皆おそろしく長い中に、今度のはなぜ短うござると、……(二下349-16)

⑨ 「髪結床ノ障子ニツキ」其中には素人絵の武者や役者、あるひはさまくの見立物などが有たけれど、……(二下355-4)

「ナカ(1)」では「広い空間」が「①大雪、④十字街、⑤雲」であり、

「一定の空間」は「②色々な書物、③人間の腹」である。「ナカ(2)」では「複数(多く)のもの」の意がそれぞれ、「⑥さまくなる」「⑦千五百両」「⑧何とやら院……」「⑨武者や役者、さまくの」ということばで示されている。この点を前掲天草本平家の例と比べると、

「広い空間の中心」の意では、HとIを受けており、「複数(多く)のもの」の中心」の意では、Gと同様であるから、ナカが基本的意味では前代を継承していることがわかる。なおナカの存疑Iは、

⑩ ……夕方になると「寒クテ」震上る様になつて、へ中略」単物の重着など、いふ中に、おれは其用意がなかつた。(二上342-5)

の「中」であつて、原文に振仮名のない「中」を索引はナカと見ているが、私は前掲膝栗毛の26などと同類の、時間を示すウチではないかと思うが、今は深く検討する余裕がない。

B. ウチ(1)

⑪ 遠見の番所の体、松の木が二本、あねさまが三人まで、此やうな些ち々な箱の中うちにしかけてある。(初中289—5)

⑫ ……家の内うちには井いの神、……(二上329—6)

⑬ ウ、都の内、……(二下361—7)

⑭ 榎吉、箱の内より出して見せる(一本ノ榎ヲ)の意(同363—6)、「榎吉」は人名

(⑪は視機関らくくりの口上をまねたことば)

B. ウチ(2)

⑮ おいらア一年中金がなくて苦勞するから、是も親孝行の内うちだらうス(初上274—2)

⑯ ……砂場で貸かした蕎麦の代錢三十六文、しかも其内角錢が一文交つたさかい、おれも男ぢや、そりや取るまい。(初中294—7)

⑰ 是でも大勢の客の内にはむづかしい人があるはな。(二下354—9)

「ウチ(1)」は上代以来の空間的内部、特に⑪⑫⑬は閉鎖的内部の意を受けついでいるが、「ウチ(2)」については、特に⑯⑰が多数についてウチを使つてゐる点で、恐らく天草本平家A・B等を受けてゐるのではないかと推定される。なお⑯は上方弁だが、ウチのような基礎語では、当時も東西の差はないと見る。

ところで浮世床の「ナカ(1)③」の例は、ナカとウチの語史研究上、次の点で注目すべきものである。

これは自分の飲んだ水が「腹のナカから」へそのあたりまで染みわたつたと述べてゐるが、次に示すように、中古語史料としてのかげろふ日記と、中世語史料としての平家物語(旧大系本、龍谷大学本が底本)の用例では、ハラノウチであるから、浮世床では、明らかに「閉鎖的な」「腹」についても、ナカの現れてゐる点が注目されるの

である。

⑱ 七八日ばかりありて、わが腹はらのうちなる蛇くちなありきて肝きもを食はむ、……(日本古典文学全集蜻蛉日記・底本Ⅱ宮内庁書陵部蔵御所本、256—7、中巻・天禄二年四月)

⑲ 平家の子孫は去文治元年の冬の比、ひとつ子ふたつ子をのこさず、腹はらの内うちをあけて見ずといふばかりに尋たと(ツ)て失なせて(こ)ぎ。(巻十二・六代被斬、旧大系下417—2)

「かげろふ、平家にハラノナカは現れない。」

「閉鎖的内部」へのナカの、浮世床にあるような進出は、明治以後にも続いて、今日に及ぶものと考えられる。

例えば、生粋の江戸語・東京語を考える上で「欠くことのできない資料」とされる牛店「雑談安愚楽鍋」の用語索引によれば、やはり次のような「腹のナカ」が見えてゐる。

⑳ ……あんまり爛ぐんがあつすぎて腹はらの中で羽目はめを敲たたいて、三介さんけいを悪口あくぐちぜ。(三上、14裏²)

これはまさに、「腹の内部から腹の皮をたたく」という発想である。なおこういう「内部」へ、ナカが自由に現れた例としては、次のものも数え上げてよからう。

㉑ ……風船ふうせんといふものを造つくつて大きな円まるい袋ふくろの中なかへ風かぜをはらませて……(初、8表²)

もちろん、浮世床「ウチ(2)」の傾向もそのまま続いてゐる。「ウチ(1)」と併せて示す。

㉒ すると大きなふくろへ一いっぱいはらませてきた風かぜだから四方八方へひろがツて国の内うちがすゞしくなるといふ工風くふうで……(初、9表¹)

ウチ(1)

⑳……うちからきれいなむすめが山ぶきの花をぼんへのせて持つてきて……(二下、11裏8)

㉑……せうじの内にてどうれとこゑをかける(三上、17裏8左)

㉒は、㉑とも関連して、「袋」という現実の空間につきナカとあるが、㉒は「国」という「囲いの内部」の意識が働いて、伝統的なウチとなつたのではないか。㉓㉔は、伝統的な、本来のウチである。

ウチ(2)

㉕としごろ四十ぐらい、居じよくていの男、……ぢやうれんのうちに入り、かうざのきはへつきて、……(二下、8表8左)

㉖「日本国ガ」地球の中の強國となるとおもへばナントたのもしいとてではないか(二下、22表4)

㉗……御用心であづかりおいた中から會計とその日の立前を此方正ちやくぶくして……(三上、21表3)

㉘……浜へ中略のしんるいうちからおころを異妾に出しちやアどうタ……(三下、5表1)

どれも浮世床の「ウチ(2)」の系列として自然に続いてきている。

㉙の「ぢやうれん」は「定連客」の意だから、㉗をそのまま受け、

㉚は金銭の着服の意だから、㉛の直系である。㉜㉝も、多数についてのウチである以上、結局その系列の中に収まるものである。「ウチ

(1)……3例、ウチ(2)……4例」で、これがこの種のウチの全例である。

なお、「ウチ(2)」が現代語にも受けつがれていることは、次のような辞典の用例からも明らかである。

㉞うち「内」一(名)……㉟一定の性質・状態・数量を限つた範囲の中。……「自然科学の——で最も自然科学らしい医学を」[妄想……森鷗外] (新潮現代国語辞典、一九八五年、新潮社刊)

㊱うち「内」一(名)……㊲ある範囲に含まれるもの。「会員の——から探す」……㊳ある数量のなか。「三つの——から一つを選ぶ」(大辞泉、一九九五年、小学館刊)

三ま と め

基礎語史研究の実践例を示すという立場から、土左日記承平四年十二月廿七日の条「かくあるうちに」の「うち」につき、従来の解「かくある(人々の)うちに」はウチの語史の解明によつては支持されないこと、そのウチは時間的意味を示すものとして、中世、近世、近代、現代と続いてきたことを史料に基づいて述べる一方で、現在「多くの人・事柄の一部」の意で行われているウチの用法が、歴史的にどういう経過をたどつて受けつがれてきたかを、ナカと対比しつつ、主として中古以降の実例によつて記述してみた。またウチは、ある種類に属する人やものごとを取り囲む「一定の枠」の意から、抽象的な、多くのものの一つ、いわば one of them の意へと変わり、本来その意味をもつぱら担っていたナカの意味と接近して現在に至つたのではないか。その史的過程についても述べてみたのである。

なお、本稿で扱つたウチ・ナカのような基礎語の語史の記述は、各時代にわたつて等質的なものを扱うという「斉一性」の観点から見ると、従来音韻史で扱われた「ハ行子音の歴史」、文法史で扱われた「動詞活用 of the 歴史・代名詞の変遷」などと同列に考えられる面があるのではないか。私としてはそういう観点からも今後、この方面の開拓が望ましいと考えるのである。もちろん、こういう研究の充実のためには、各時代ごと史料ごとに、基礎語史料を収集整備する必要がある。本稿の史料はごく一部にすぎないから、その点では全

く不十分ではあるが、従来の私見の一端を述べさせていただいた。御批正を得たい。

なお、この種の問題として今後開拓されるべき語史の例を挙げれば、上代以来の「ヨ」と「ヨル」の語史、関連して「ヒ」と「ヒル」などがある。私は以前に中世あたりまでは探索したが、特に近世以降現代までが不十分である。今後の課題としたい。^{注10}

注1 ナカが多数のものについて用いられることは拙著『基礎語研究序説』のIII章六節で述べたが、最近は辞書にもそれと同様な主張が取り入れられている（例えば巨樹安藤千鶴子編『古語林』一九九七年一月、大修館書店刊）の「うち・古語ウォッチング」の項（172ページ）に、

ナカリ上下、左右、前後などの中間の意。明るく広い空間中の一点を示す。多数からひとつ選ぶ場合もナカ。
とある。

注2 「かくあるうちに」を時間の経過と見ることに對する異論と、それについての私の反論については、次の拙稿参照。

「基礎語の意味研究と古典の読解——「なか」と「うち」——」（日本科学者会議編、月刊誌『日本の科学者』一九八七年一〇月）

注3 日本国語大辞典に「うみなか」「のなか」は見えるが「うみ（の）うち」「のうち（野内）」は見えない。

注4 例えば松村明氏は次のように述べておられる。

「浮世風呂・浮世床につき」文化・文政期における江戸語の姿を克明に記録したものととして、江戸語研究の上においても貴い資料とされている。（『江戸語東京語の研究』一九五七年旧版、東京堂刊）138ページ）

注5 この「いや」は「礼」の字の訓としての「いや」をさす。

注6 多数の中、また広い空間をさして「あるがなか」と言い、「ある

がうち」と言わなかったことについては、源氏物語の用例について述べたことがある（拙稿「古典文学の作品における『中』字の訓——ナカとウチの意味分析——」『国語と国文学一九九七年二月』）。この④の例は近世までそれが続いていることを示す。

注7 「くちよせ」のことばとして、天狗のふり回す「羽団（はうちわね）」に追われるということから「羽がかたき」と言うが、もとは「金（かね）がかたき世の中」にかけたもの。「雲のナカ」は広い空間の中心。

注8 これは夢のうちでおこったことの話。

注9 同索引1ページ。

注10 拙著『基礎語研究序説』III章二など参照。

——静岡大学名誉教授——

（平成十年九月十二日 受理）

（平成十年十一月二十五日 改稿受理）